

Thoreau 文学の背景

川 津 孝 四

I

いかなる文学者の作品もその人の生活と比較考慮する時、多少の差こそあれ、いろいろな意味で両者は関係を持っている。一見全々関係のないように見える場合でもよく観察すればその作品の蔭にその生活の影響は自然とにじみでているものである。況んや自分の生活そのものを取扱うならばそれは自叙伝そのものであり、少なくとも自叙伝的となる。

Thoreau は普通の意味でのまとまった自叙伝は書かなかった。また文学形式の点からいって、詩は若い頃に相当書いたが、その他の文学形式では劇も書かなければ小説も書かなかった。唯散文としては、Journal、それも普通の日記とは大分趣を異にして、随想、随筆、思想の湧き出るままに誌した感想、自然を視るままにその紋景や自然に接したために興る感境靈感を、そして古典を引用し、名詩を掲げ、己が論説を展開する。もちろん紀行も書く、こうした彼の Journal は龍大な量である。

一人人間の生活には外面的生活と内面的内至精神的な生活があるが、彼はそれ等の両面の生活そのものを随時に丹念に記録したのである。だから彼は普通の意味でのまとまった自叙伝は書かなかったけれど、こうした意味では彼の全作品は彼の生活そのものの記録であり、自叙伝であったともいえよう。

彼の龍大な量の日記そのものはいうまでもなく、単行本として、彼の生前に出した *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) にしても、*Walden* (1854) にしても、死後に出た *Excursions* (1863) にしても、*The*

Maine Woods (1864) にしても、*Cape Cod* (1865) にしても、*A Yankee in Conada* (1866) にしても、それらは彼自らがあるいは編者がある程度整理して章を作り、形体を整えたとしても、特別にちゃんと終始一貫した一つのまとまった文学的形式をもった種類のものではない。それは彼独特の特徴をもった文学形式で、要するに特殊な作品を除けば大概のものは日記、随想、論説の連続といったものであり、しかもそれらは彼の外的生活と内的生活の記録そのものなのである。

だから彼の文学を知るには彼の外的生活はもちろん内的生活のよってきたところをいろいろの面からよく知らなければならぬ。この両面が彼の文学の背景であると同時に彼の文学そのものでもあるといえる程よくそれが彼の文学に這入り込んでいるのである。

外的生活はいわゆる経歴である。内的生活は彼の精神的な生活であり、教育や読書や人々との接触も時代の風潮精神も深い関係があるが、彼の場合は特に自然と深い交りをもっていて、普通人と異って大自然そのものから深い靈感を受けていたことを忘れてはならない。こうした彼の精神生活の発展は自ら彼の文学の力となり、発展となっている。

彼は Academy で学び、Harvard 大学を卒業しているので、Channing もその *Thoreau, the Poet-naturalist* (p. 49) 中で述べているように、彼はギリシャ語やラテン語はもちろんフランス語も相当に出来たし、イタリア語やスペイン語、独逸語についても多少知識をもっていた。

彼が古典文学に通じ、それを愛好していたことは彼の著述の随所に窺われる。たとえば、*Walden* の *Reading* の章中での彼の古典文学に言及しているところを見ても *A Week* 中で Homer を讃えているところを見てもよく分る。

彼は Homer, Æschylus, Pinder, Anacreon, Aristotle, Pliny, Cato, Columella 等を翻訳さえている。中でも Homer と Virgil はもっとも愛好した。

英文学では *Chaucer, Milton Ossian, the Robin Hood Ballads, Lycidas* を愛読した。また Elizabeth 朝と 17 世紀初期の作家のものをよく読んだ。A Week にはその辺の時代の詩人達からいろいろ引用している。

彼は *Bhagvat Gheeta* や *Vishnu Purana* 等梵語文学にふれ、始めはそう深く研究していなかったが、追々と印度やペルシャや支那など東洋の古典聖典を読んで強い感銘を受けた。その頃にはそうしたものの英訳本もいろいろ出ているので、主な文学者達は大体そうしたものを知っていたが、彼は特にそうであった。1855 年に彼の英国の友 Cholmondeley から東洋関係の書物を多数贈られてから彼の部屋には東洋に関する古典聖典、その他のものが可成りの文庫をなしていた。そして彼の思想に大きな影響を与えている。

また近代では独逸の Kant などの哲学思想の影響も受けているが、近代文学では Carlyle や Ruskin のものは興味をもって読んだが、物語や小説には全々興味なく Dickens の作品などには輕蔑の念をささ抱いていた。

彼は博物学者とってよい位博物的知識が深かったが、そうした素養は彼が早くから Aristotle や Ælian や Theophrastus などに興味を持ってよく読み、Pliny のものは特別力を入れて読んでいたためでもあった。

しかし、彼はそうした古典にしろ、梵書内至東洋の聖典にしろ、近代文学書にしろ、博物書にしろ、それらの書籍文献の中に止まることなく、それらを自己の拡大のための養分とはしたが、いつも彼自ら自然に直接接して研究確認し、なおさらに詩人的に深い靈感をもって自然に浸入し、物心一如の境に恍惚とした。こうして彼は悠々たる生活をし、その外的内的生活を記録した。しかも彼は記録そのものよりは生活そのものを尊び、生活をより立派な芸術としようとした。

II

Thoreau は *Excursions* の中の *Walking* という章で West について、また

Wildness について次のように書いている。

I turn round and round irresolute sometimes for a quarter of an hour, until I decide, for a thousandth time, that I will walk into the southwest or west. Eastward I go only by force; but westward I go free. Thither no business leads me. It is hard for me to believe that I shall find fair landscapes or sufficient wildness and freedom behind the eastern horizon. I am not excited by the prospect of a walk thither; but I believe that the forest which I see in the western horizon stretches uninterruptedly toward the setting sun, and there are no towns nor cities in it of enough consequence to disturb me. Let me live where I will, on this side is the city, on that the wilderness, and ever I am leaving the city more and more, and with drawing into the wilderness. I should not lay so much stress on this fact, if I did not believe that something like this is the prevailing tendency of my countrymen. I must walk toward Oregon, and not toward Europe. And that way the nation is moving, and I may say that mankind progress from east to west.

Thoreau writings (vol. 5), Walking in Excursions (pp. 217~218)

「私は時々1時間の4分の1位ぐずぐずしてあちこちを見廻してから、西南あるいは西へ歩いて行こうと決める。東へは唯無理に行くのであるが西へは自由な気持で行く。其処へはビジネスで行くのではない。東の地平線の向うには美しい風景とか心ゆくまでの野性味や自由が見つかるとは信じ難い。そっちへの散歩を予想しても興奮を覚えない。が西の地平線に見る森は、沈みゆく太陽の方向に遮られることなく拡がって、そこには私の心をかき乱すほどの力をもった町も市もない。私は自分の欲する処に住みたい。こっち側には都市があり、あっち側には荒野がある。そして私はいつもますます都市を離れて、荒野へと引込んでいく。わが国人達の一般的傾向が何かこのようなのだと信じなかつたら、この事実をそんなにひどく強調したりしないだろう。私は欧州へ向ってでは

なくオレゴンに向って歩かねばならない。国民が動いているのはその方向だし、人類の進歩は東から西へだといつてよいだろう。」

このように Thoreau は町や都市よりは荒野を好んで、東へではなく、西か西南の方向へと足を向けた。といつても Boston へも New York へも幾度も行っているがそれは特別の用向があつてのこと、西南や西の荒野へはそうした特別の用事がなくても逍遙のために唯荒野を歩くために自由な気持で向つたのであつた。彼はその 45 年の生涯で本当に旅行らしい旅行をしたことといへば、兄と共にした Concord 河と Merrimac 河の旅、E. Chenning との Cape Cod への旅、Maine の森やカナダへの旅、南の方では New Jersey への旅、西部の方向では 1861 年病氣保養のための Minnesota への旅位であつて、大旅行といつたものはしていない。Oregon へも行ったことはない。生涯の大部分は Concord を中心としたごく近いところをよく小旅行をし、また毎日のように野や森や湖畔を逍遙したのであつた。成程この頃アメリカの人達は頻りに西南や西へ——もっと分りやすく広い意味でいへば frontier へまたいわゆる「西部」へと——ある者は自由を求めて、ある者は金や鉱石を探して、ある者は牧場や農場を開拓するために、またある者は酒場を出したり、投機をやるために向つた。そして荒野にはやがて町ができ、市ができて行くのであつた。しかし Thoreau が西を好んだのはその Wilderness そのものを目指したのである。彼曰く、

The West of which I speak is but another name for the Wild, and what I have been preparing to say is, that in Wildness is the preservation of the World (Walking, Writings of Thoreau vol. 5 p. 224).

「私がいうところの西とは野生地の別名に過ぎない。私がいわんとしているのは野生の内にこそ世界は保全されるということである。

「荒野で探したあらゆる木はその繊維を送り出し、都市は幾らでも金を出してそれを輸入する。人類を支える強壯剤や樹皮は森や荒野からくる。われわれの祖先は野蛮であった。Romulus や Remus が狼の乳を飲んだ話は意味のない伝説ではない。興隆したあらゆる国家の建設者達はその栄養や力を同じ野生の源泉から取っている。それに一目見られると如何なる文明も堪えられないような野生味を私に与えよ。——シマカモシカの骨髄を食って生きているような。」

‘Life consists with wildness. The most alive is the wildest.’(Walking, Writings of Thoreau Vol. 5. p. 226.)

「生命は野生と共に存在する。もっとも生々としたものはもっとも野生的なものである。」

Thoreau はかく述べている。また、文学の上では「minstrels の時代から湖畔詩人に到るまでの英文学において、——Chaucer や Spenser や Milton それに Shakespeare さえ含めて、この意味でまったく新鮮で野生的な調子のもんといえるのではない。それらはギリシャやローマを反映している。本質的にならされ文明化した文学である。その野生的なものは緑林であり、その野生的な人間は Robin Hood である。がそれも気持よく自然を愛するところは沢山あっても、自然そのものは余りない。

この野生に対する憧れを十分に表している詩で引用すべきものを知らない。Augustan 時代や Elizabethan 時代では、要するに、如何なる culture を以ってしてもそれでは与え得ないところのあるものを私が求めているのを諸君は感知されるだろう。如何なるものよりも Mythology がそれに近い。」とかく Thoreau は Wilderness を求め、それによって生々とした生命の力を吸い取ろうとした。だから世俗的なアメリカの人々が西部に向ったのとは、その表面は一寸似ていても、内なる精神が全く異っている。で

はそれはどのように異っていたのか。同じ時代の他の詩人や作家でよく似た人々があったか。ここに二、三その例をあげて比較して見よう。

フランスの Jean-Jacques Rousseau (1712~1778) や Chateaubriand (1768~1848), イギリスの William Wordsworth (1770~1850), それにアメリカの James Fenimore Cooper (1789~1851), これらの人々はいずれも自然の美を描き、自然を愛した人達であり、時代的には Rousseau が少し早い位で、後の三者は Thoreau とほぼ同時代であった。

ジュネーブ生れの Rousseau はスイスの美しい山や湖や牧場を背景とするものを書いてフランス文学に初めてといてよい位自然の美を讃え、人為的なものは人を駄目にする、文明の諸悪に挑戦し、人為的人間に対する自然人の優位を示し、Return to nature を説いた。

Chateaubriand は 23 歳 (1791) の時、未知の世界を求めてアメリカに渡り、その原始的な自然に魅惑され、後に出した *Atala* や *René* の中にもそうした自然の魅力を描いているがフランス大革命で倒れた彼の母の遺言もあってカトリックとなった彼の自然観は自ら Thoreau のとは異ってきた。

Wordsworth はその故郷の Cumberland や Westmorland の豊かな美しい自然の美やそれに対する郷愁を自伝的な長詩 *The Prelude* やその他の詩で歌ったが、あの湖畔地方とは比較にならない程に野生的で雄大な自然がこの新大陸の西部には到るところにあった。Pantheism であった点は Thoreau とも似ているがよく見ればいろいろ相違点を感じられる。

ところが Cooper は同じ米人であり、その荒野を背景とした英雄的な人物を描いている。しかしその Cooper は New York 州の Cooperstown の大地主の家に生れたし、荒野を讃美したとて、決して好んで荒野に住みはしなかった。殊に結婚後は New York 市近に紳農として、立派な家に住いながら、過去の記憶により、想像によって、新鮮な自然の荒野へ、アメリカ建国の精神の支配する辺境へと立ち帰って、その荒野の中の勇ましい

Indian や辺境開拓者や独立戦争時のことを題材にして、民主的な英雄の理想像を描こうとしたのであった。

Thoreau にはそれらの人々とは異った彼独特なところがあった。彼は誰よりもさらにさらに深く自然に接して、自然のあらゆる現象や、動植物の生態まで詳細に観察したので、一見非常に科学者風にも見えるが実はきわめて詩人的であり、なお哲学的宗教的でさえある。彼は天地宇宙にみんぎる神秘的な霊あるいは生命と己が生命との不思議な触れ合いを感じ、今度は己が心の開拓者となって心中の「西部」「荒地」を求めて果しない精神的旅を続けたのである。それにはどうしても自由が必要である。そこで彼は生活をできるだけ簡素にして、あらゆる余計なものを去って、独り自然の中に赴いた。Wilderness の世界はその豊かな美と自由さでこの Thoreau の身と心を迎えた。

元々北アメリカ大陸は原始的なインディアンがあちこちに小さな部族をなして住んでいたもので、いわばその頃は野性味と自然の美を備えた豊かな処女地が果し無く広がっていた。そこへ真先にスペインの征服者や布教師が東南部沿岸地方やカリフォルニア等に来り、それに次いでフランスの冒険的な商人が東部カナダ国境地方からミシシッピの渓谷辺へ這入り込み、続いて英国からの植民者たちが渡来し、欧州からも移住してくるし、こうしてこの北米大陸は追々とその姿を変えて行った。そして遂には英国は大西洋岸の南北に長い地帯を植民地として開拓するに到って人口も急激に増加し、新しい都市を形成し、西欧の文化を伝来した社会が発展し始めた。そしていわゆる七年戦争（1756～1763）によって英国は北米大陸における仏国の勢力を駆逐し、スペインも後退させ、さらにインディアンも一時鎮圧して、アパラチア山脈（Appalachian mtns）以西の広大で自然豊かな土地への進出という大きな可能性ができてきた。しかし英政府の植民地政策としては、この山脈の西側の広大な地方を開拓させる場合は、統治上の困難も起こるであろうといろいろの議論があったが、山脈の東側が次第

に飽和状態になると人々は新しい広々とした自由の土地を求めて、山脈の谷を縫って、西へ下り、Pennsylvania の西部、Ohio, Kentucky, Tennessee などへ流出して行った。やがて独立戦争（1775～1783）となり、その上インディアンからの攻撃もあり、英国が植民地として難問としていた広大な西部の統治は独立戦争後の米政府にとってもなかなか重大な問題であった。その上外国の干渉や各州の要求、土地の投機家や商人の思惑などこの西部の問題は容易でなかったが、西部への移住は堤防を越えた洪水のように大きな自然の勢となって発展して行った。こうしてやがて、Mississippi 河が合衆国の西の境になろうとし、第三代大統領 Thomas Jefferson の時には Louisiana（ここでいう Louisiana は今のとは違って東西はミシシッピ河からロッキー山脈、南北はメキシコ湾からカナダ国境に達する広大な範囲であった。）を 1803 年にうまく仏国から購入したので、この領域への移住が促進された。そして政府の命をうけて、Lewis と Clark の両名は Mississippi からロッキー山脈を越えて大太平洋岸へ到る大探検を 1804 年から 2 年間にわたって決行した。この時の日記は、*The Lewis and Clark Journals* として 10 年後の 1814 年に刊行されている。かくして Minnesota, Iowa, North Dakota, South Dakota, Nebraska, Kansas への移住の路が開かれ、さらに 1812 年の戦争の結果 Mississippi までの Mexico 湾岸の開拓ができるようになり、戦後再び平和となるや西部をさして米人はこれまでにない大移住を始めた。そして 1830 年代には開拓の境界線は Missouri 河に達した。1845 年には Texas を併合し、1846 年には Oregon 問題が解決、1848 年には California を手に入れ 1853 年にはメキシコから広大な領土を手に入れた。以上のような歴史的な領土拡大の事実と、1849 年の California におけるような幾つかの gold rush とは元来 businesslike で冒険好きの米人の心を強くひきつけ、ロッキー山脈を越えて遠く大太平洋岸まで大きな希望を懐いて行く人が多くなった。そして California に限らず、Nevada や Colorado へさえも到り、Mississippi の谷や同沿岸の平野へ続々と移住し

て、いわゆる Great Migration (大移民) の時代となった。もちろん欧州から新しく渡来した者も非常に大勢あった。こうして辺境が遠く拡がりゆくとつれて東部はもちろん中部も益々人口が増加していった。1812年に人口 13,000 であった Illinois が 1850 年には 85 万人に増加したといわれているのを見ても如何にこの大移住がすさまじいものであったかが察せられる。

Monroe 大統領があ有名な Monroe Doctrine を宣言したのは 1823 年で欧州からの不干渉主義非植民主義を掲げて自分の縄張りをしたのだがさらに米国は未開人や後進国の領地を征服し、その代りに優れたアメリカ体制を太平洋岸まで拡大し、これは神がアメリカに与え給うた天命 'Manifest Destiny' 「明白な宿命」であるとしたが、それはインディアン保護領はもちろん、外国領へまで侵入して既成事実を積み重ね、西部へ西部へと拡げて行った開拓民のおそろしい力がその基盤を成している。

1870 年代の中葉に本格的に開始された大平原地帯への移住は 1880 年には西経 100 度線を越え、80 年代の後半には Kansas, Nebraska, Dakota の西部と Colorado の東部に向って、農民、商人、職員、投機家が押し寄せた。しかし 1890 年には国勢調査報告は西部 frontier line の消滅を伝えている。

Thoreau の祖父がアメリカに移住したのは独立戦争前 2 年の 1773 年であるが、Henry が生れたのは 1817 年、Walden 湖畔に独居を始めたのが 1845 年でそれは米国が Texas を手に入れた年であり、死んだのは 1862 年だから彼の生涯は丁度こうした大移住の行なわれていた最中であるから、西部への大移住という大きな社会的現象はもとより、彼にとっても大きな関心事であったであろう。しかし彼が西部に強い関心を持っていたとて、それは彼が普通人のように開拓や金鉱を目指してでなく、彼が目指したのは西部すなわち Wildness で、それもその Wildness のもつ自然の美と力と自由さが大きな魅力であった。彼は地理的に遠い西部をみざして行く替り

に Concord からほんの 1 哩半位のところの Walden 湖畔に赴いて、Alcott から借りた斧で樹を切り倒して材木として自ら小舎を建てて 2 年と 2 カ月 独居した。これは西部へ赴いて開拓を始めた人々の様子とは一見似ているが全く似ても似つかぬものであった。成程普通の移住者達は最初は余儀なく簡素な生活もしたであろうが、開拓が進むにつれて豊かな俗人の生活をしたのであるが、Thoreau は自ら好んで Simple life によって、できるだけ余計なものを去り、「人生の本質的な事実のみ直面し、それから教わらなければならぬことを学び得ないかどうか、また死に臨んだ時自分が本当の生活をしていなかったことを発見し得ないかどうかを知るため、悠々自適したかったからこそあの森へ行ったのだ。人生でないような生活をたくはなかつた。生くことはそんなに高価なものなのだ。またどうしても止むを得ないのでなければ人生抛棄を実行したくはなかつた。私は深く生活し、人生のあらゆる精髓を吸収したかった。」

このように Thoreau は *Walden* の '*Where I lived and What I lived for*' という章中で彼の独居の真の目的を述べている。かくして、彼は自分の住むところは天文学者達が夜毎に見る多くの天体とも同じ位遠くに離れており、宇宙の中のかくも離れた、だが、永久に新しく、穢れざるところに自分の家が実際に位置を占めていることを発見したのであった。そして朝眼覚めては湖で水を浴び、ボートを浮べては白日の夢を見、おしげなく陽光の中の豊かな日々を送り、しかも仕事場や教卓でそうした日時を浪費しなかつたことを後悔しなかつた。なぜなら、そうしている間に彼は身心のこよなき喜びを感じ、生気をとりもどし、内的に豊かな所産があったからだ。

しかし、その湖畔を離れて以来、樵が森の樹を一層切り荒しているのを嘆いているし、その湖が何処にあるかも知らない村人達は、少くともガンジス河のように神聖であるべきこの湖水で浴びたり、水を飲んだりする替りにパイプを村にひいて、皿を洗おうとしているといっている。

私が Walden 湖を訪ずれた時二、三十名の者が水浴していた。私もその仲間入りをした。水は清く、湖水の周囲は森でとりまかれていた。おそらく Thoreau がこの湖畔に住んだ頃はもっと大きな樹が鬱蒼と茂っていたのであろう。

これが若し今の日本であつたらまたたくまに別荘が立ち並び、ホテルができて観光客が押しよせ、水はよごれ、森もなくなるのではないかと想われた。そんな情景を見たら Thoreau はなんというであろうか。今でも Walden の湖畔にはほとんど家を見ず、森が取りまいている。唯道路はよくなって自動車もバスも通るが湖畔をめぐる路へは車は這入れないようにしてある。

III

前の節では Thoreau の時代を中心として、その前後の北アメリカの自然とそこへ移住して行った民族の動き、西部へ西部へと移住して行った歴史的事実、彼と同じような作家の自然に対する態度等広い周囲の背景について述べたが、今度は Thoreau 自身の家庭的個人的背景について述べよう。

H.D. Thoreau は 1817 年（文化 14 年）の 7 月 20 日に Massachusetts 州の Concord に John Thoreau を父とし、Cynthia Dunbar を母として生れた。

そしてこの John の父すなわち Henry の祖父は英仏海峡の仏本土に近いところにある Jersey 島のフランス系の裕富な家の出で、1773 年に St. Helier から New England に移住して、スコットランド系の婦人と結婚し、ボストンで商売をやっていたが、1801 年に Concord で死んだ。John も商売をやっていたが事業に失敗して父からうけ継いだ財産をなくして、鉛筆製造の仕事を始めた。小柄で物静かで、実直で仕事熱心でしかるべき時には友人とも親しくし、社交的でもあったということである。Henry の母 Cynthia は背は高く、きりっとした顔だちで、機智に富み、よい声

で上手に歌を唄ったし、口達者で会話をしばしば一人じめにしていた。Cynthia の父 The Rev. Asa Dunbar は 1787 年に死んだので後家となったその母すなわち Henry の祖母は後に Minott という Concord の百姓と再婚した。Cynthia の兄弟 Charles Dunbar は Dunbar 家の奇妙な特色である wit に富み、風変りで奇妙な放浪の生活をおくり、町から町へさすらった。こうした性質は Thoreau にも繋がりがあるように想われる。

Cynthia が John と結婚したのは 1812 年で Helen (1812), John (1814), Henry (1817) それに Sophia (1819) の二男二女を生んだが、Henry が三番目の子として 1817 年の 7 月 12 日に生れた家は彼の祖母 Minott のあの家で、それは Concord 村の中心からいえば東方に当る Pine Hill の手前の Virginia Road に沿うたところにあって当時すでに随分古びた家で果樹園や牧場にとりまかされていた。この祖母の家に Henry は生れてから 8 カ月間程住んでいたがそこから Concord の端れの Lexington Road 沿いの家に移ってまた同じ位の期間を過し、1818 年に両親は 5 ケ年程 Concord を離れて、その間、そこから十哩離れた Chelmsford という町で暮し、その後 Boston へ移った。

Henry が始めて学校へ行ったのはこの Boston にいる時であった。だが両親のやっていた商売は Chelmsford でも Boston でも思わしくなく、1823 年には再び Concord へ帰り、それ以後そこに落付いたので、後年において Concord という地名と Thoreau という人名がかくも密接な関係をもつようになろうとは誰も夢想だにしていなかった。

この Concord というのは Boston の西北 20 哩位のところにある村で、Henry の小供時代には約二千の住民が散らばり住む村の中心であった。この Concord という名は「調和」を意味する。それはここが古くはインディアンが住んでいたところであったのを 1635 年に戦うことなく平和裡にインディアンから買いうけて殖民地としたが故であった。

この Concord の河にかかっている Old North Bridge は 1775 年 4 月 19

日のアメリカ独立戦争勃発時の戦のあった記念すべきところであり、橋のたもとにはその記念碑や墓がある。1825年に独立戦争50年記念祭が開催された時 Henry は幼少7歳であったが、その記念祭に出かけて行ったようである。

私は Concord を訪ずれて、河にかかっているこの古い木橋の上に立つてここが独立戦争の最初の火ぶたを切ったところかと感慨無量であった。こちら側の岸べには樹木が茂り、向う岸には丘が起伏して居り、静かな河面を若いカップルがボートを漕いでいた。絵になる眺望であった。Concord はこの戦で早くから知られていたが、後には Emerson, Thoreau などの transcendentalists 達が定住して超越主義運動の中心地となったため、アメリカ文学史上非常に重要な意味のある土地となった。

私が Concord を訪ずれたのは今から7年前の1964年であったがその時でも綺麗な道路をはさんでぼつぼつ住宅があり、いずれも樹木の多い庭があるので、至極閑静な田舎という感じであった。だから Thoreau 時代とあまり変らないのじゃないかと想われる程であった。日々急速に田舎が都会化する日本の有様を常に目撃している自分には不思議な程の想であった。

Emerson その他の文人達が住んでいた家々もたずねてみた。でも Thoreau の時代の村は少くとも、もっともっと閑静だったことであろう。

当時の Concord の住民は農民が主で、店といっても雑貨店がある位で、大抵何でもそこで売っていたらしく、住民は素朴で貧富の差もあまりなく、村は和かな気分だったらしい。Concord の指導的な人物といえは Thoreau の誕生後も長い間 Unitarian 派の村の牧師で 'Old Manse' (後に Hawthorne が住んだ) に住んでいた Dr. Ripley と他には Samuel Hoar 位で Dr. Ripley は50年以上もここで牧師をしていたし、Henry Thoreau に洗礼を施したのも彼であった。

Concord 周辺は概して平坦な草地が多く、その中を Assabet River が東北に向って流れ、Sudbury River と Concord 村の北端で合流して Concord

河となり、それがやがて Merrimack 河となるのである。

Concord の村の中心には広場があり、枝を抜げた榆の木と白塗の木造の教会堂があった。

Thoreau はこうした環境に生れたが子供時代は村の他の子供らと同じように牝牛を牧場へ追うてゆく仕事もしていた。彼は雷が嫌いでごろごろ鳴り出すと直ぐに家へ逃げ帰ったそうだが、なかなかきかん気で、意志が強く真面目であった。この意志が強く真面目であったのは彼の兄弟姉妹四人に共通する性質のようであったが、Sanborn によれば上の二人すなわち Helen と John は父方の血を余計に受け、下の二人すなわち Henry と Sophia とは母方の血を余計に受けていたようである。しかし「実際は Thoreau 家の特徴は Henry にだけ顕著である」と附言している。(Sanborn's Introduction to *Walden*. The world classics series, P.X. p. 30)

彼らはいずれも教職についた事があり、また後には奴隷制度反対のために協力もした。

Henry は 1830 年頃 Concord のアカデミーでギリシャ語を学び、1833 年には Harvard 大学に入学し、Hollis Hall に寄宿した。彼の家は大学へやる程に豊かではなかったので叔母や姉が学費の一部を負担した。だから彼も休みには個人教授をしたりして学費稼ぎをした。また大学の 2 年の時には Boston に近い Canton で牧師 Brownson の経営する学校で教えながら自分も独逸語の勉強をした。1834 年に Concord に定住した Emerson が当時の Harvard 大学長の Josiah Quincy 宛に手紙を出して Thoreau への奨学金下附方を依頼したのはこの頃のことであった。それに対して学長から Emerson に出した手紙 (Sanborn:- Thoreau, pp. 53~54) には Thoreau は真面目だが成績が悪くなっているのは病気のためだと思う。規則によると給費生に推薦できないのだが、特別の計いで 25 ドル 出るようになった。病後帰校してから、Thoreau の勉強振りについてどうやら彼に不利な見方をされているようだが、それが何のためか分らないが私は彼の 'the good-

ness of his heart and the strictness of his moral principle.' 「善良な心と厳格な道義心」を十分認めているので、彼のために現状の下ででき得るだけのことをしました、という意味の返事を書いている。

彼が Harvard 大学時代に病気をしたり、また幾らか学校の制度に対する反感もあったりして、成績も思わしくなく、教授達からは十分理解されないで、Thoreau 一家の心配の種になったらしい。

彼と同じ頃であった Haskins は、「大学で Thoreau はあまり印象に残らなかった。彼は学問ではちっとも秀れていなかったし、文学的趣味をもつても知られていなかった。大学の機関雑誌 'Harvardiana' には未だ寄稿した事がなかった。……われわれが卒業した時代には、彼が将来傑出するのを期待する者など彼を知ってるものにしたかどうか疑わしい」(The Rev. D.G. Haskins in his Ralph Waldo Emerson, Boston, 1887.) といっている。

Thoreau は 1837 年 8 月に大学を卒業した。彼の級友の一人 Rev. John Weiss が学生時代の Thoreau の印象を誌しているがそれ (Rev. John Weiss; Christian Examiner, Boston, July 1865.) によると彼は 'Cold and unimpressible' 「冷淡かつ非印象的」で人に構わず、級友達は彼から遠くに離れていたようだ。目鼻立は大きいが想いに沈み、'mystic egoism' 「神秘的な自我意識」にかたまったエジプトの彫刻に何処か非常に似ているように想われたのを憶い出す、ということであった。

'Yet his eyes were sometimes searching as if he had dropped, or expected to find something. In fact his eyes seldom left the ground, even in his most earnest conversations with you.'

「だが彼の眼は時々落し物をしているように何かを探していた。事実彼の眼は人ときわめて熱心に話している時でさえ、地面から離れることはまれであった。」

また彼は古い英文学の研究に熱心で、Chaucer 以後エリザベス朝を通じて詩の本を沢山もっており、こうしたものにじっくり熱意を燃やしていた、とのことであった。

この級友の思い出が何処まで当時の Thoreau の実相にふれているかは、兎に角、彼のある面をとらえているのであろう。この大学時代に Thoreau の自意識が段々と目覚めて、社会的位置への反省となり、多少は周囲に対する反抗心を刺激したかもしれないが、常に心を内に向けて内的航海の進路を求めていたようである。また講師の一人 Channing (その甥の Ellery Channing は後に彼のもっとも親しい友となった) の教えからは少なくともいろいろな知的な利益を得たのであった。

Thoreau は大学卒業の翌年春 Dr. Ripley や Quincy 学長や Emerson の推薦状を持って Maine の方へ就職運動に行った。三者いずれも彼のことを学業人物共に立派な人であると推奨しているが、結局その就職は駄目で、後間もなく、彼は Concord で私塾を開いて、午前に4時間、午後2時間位教え、後は少し本を読んだり、野原を逍遙したりした。その後兄 John と共に教えていたが、それも2年位で町の学務委員との意見の相違もあって、学校を閉鎖した。

「若し私が何か芸術や科学に関するものを子供に学ばせようと欲するならば、私は唯誰か教授の下へやるような普通のコースをとらない。そこでは教えられまた実習されもするが、生活の術は教えられないから。……驚いた事に、私が大学を出る際に君は航海術を学んだのだと告げられた！ どうして、私がもし港を船で一回りでもしていたら、私は航海についてもっと知っていたであろうに。」(Walden ed. by G.L. shanley p. 51.) と後に書いているが、彼は大学にいる時からすでに自分自身生活の実験によって、生活の術をまた生活の意義を知ろうとした。それも単なる処世術ではなく、内的な意義ある生活である。彼が孤独がちであったのも、下を向いて何かを探している様子であったのも自らの心の内に何かを常に求めている

たのであろう。といって大学が Thoreau にとって無益であったとはいえない。Emerson の言をまつまでもなく、Harvard 大学が彼に大いに役立ったことはもちろんであろう。だが彼は英詩を耽読し、Sir Davenant (1606~1668) の *Gondibert* (1651) の研究には特に力を入れた。彼にとっては教授の講義よりも図書館の書物や自分のもつ本がずっと余計に心の糧となった。かく大学は直接よりも間接的に大いに役立った。なお彼もいつているように何より自分自身を表現すること、‘to express himself’ (*Thoreau's letter of 1843*) を大学で学んだ。

彼は Harvard に住んでいる間も戸外生活を愛したり、野外で研究しようとする気持が減退した訳でなく、むしろ、反対に修辞学や数学をやると同じように熱心に博物の研究をやり、ギリシャ古典に対すると同じようにインディアンの遺跡をととも大切に思った。いやさらに彼は体は Harvard 大学の一員であっても心魂は遠く古い友なる Nature の同情を求めて恋い慕った。

IV

彼が自分の思想を日記として書留め始めたのは大学卒業後のことであった。彼は卒業と同じ年 1837 年には文人 Emerson と親しくなった。このことは彼が真剣に文学をやろうとするのに拍車をかけた形となった。

彼は自分の運命づけられた、さげられない仕事として自然に対した。それも科学者として自然を研究するというよりは、いわゆる poet-naturalist として自然と親しみ自然を讃歌した。

彼は性来器用な人だったので生計のためには必要とあればいろいろのことをした。ボートも造れば、垣根や庭木の手入れもやり、土地の測量もやった。もちろん家業の鉛筆製造の仕事もした。しかし毎日定まった仕事をするように義務づけられるよりは、こうしたアルバイト的な仕事を時々して自分の自由な時間をできるだけ多くすることを好んだ。当時のアメリカ

北部ではもうそろそろ商工業が栄え始めており、世俗人は富の獲得に余念ない様子であったから、無理して大学は出たものの貧しい家に育った彼のことだから、普通ならそうした世俗人の一人となるべきところをその浅薄無意味な生活態度を嫌い、反対に野生を好み、自然を友とし、主観の世界へますます深くは行って行った。これは彼の性格が内省的であったことにもよるが、また彼が自然に人一倍魅せられていたからでもあった。

彼はもちろん家業の鉛筆製造業も手伝った。彼はそれを少年の頃から習い覚えていて、なかなかの熟練工でもあった。学校を閉鎖した後しばらくこの仕事に従事していた。この仕事は彼の生活の基礎として一生彼にとって役立ったようである。でも決してずっとそれに従事したのではなく、むしろ、時々手伝ったといった方がよいかもしれない。

彼の詩作は 1836 年頃に始まる。初期の詩には Davenant や George Herbert などの影響がみられる。1841 年頃には詩に対する興味も少しうすれ、Emerson の忠告もあつたりして自分の若い頃の詩の大部分を破り棄て、それからは Prose の方に力を注いだ。それでも彼の詩は相当数残っており、人によってはその価値を高く認めている。初期の詩の中 *Sic Vita* 「人生とは」はブラウン婦人の家へ投げ込んだといわれているもので、この夫人は Thoreau と Emerson とを結びつける役目をした人であった。もう一つの詩 *Sympathy* は牧師の娘 Ellen Sewall に対する愛を暗示するもので、兄もその乙女を愛しているのを知って、彼はあきらめたという episode がある。

Thoreau の散文の最初期のものは、1834 年彼の 17 歳の頃のもので、その中で自分の思想や感情や経験を日記として認めておくことの大切なことを述べている。彼の後の *Journals* は彼の著作の過半をしめ、その他の著作にも *Journals* からの材料をぬきだしたり、整理してそれになお書き加えたものもあり、Thoreau 文学としても、Thoreau の思想を見る上にも彼の *Journals* はきわめて重大な意味のあるものである。

彼のいわゆる *Journals* の最初の記入日付は 1837 年 10 月 22 日である。

1839 年 8 月 31 日から 1 週間の間、Thoreau が兄 John と共に Concord 河を下り、さらに Merrimac 河を溯って旅行した時のことは *A Week on the Concord and Merrimac Rivers* として 10 年後に彼の第一作として出版された。

それはその時の紀行に幾多の感想や思想を盛り込んだもので、それは彼の「日記」や詩の草稿、大学時代の Essay から取り出したものが多い。

「土曜日」の章にはいろいろ魚類について、その棲息する自然について、精密な観察や記録があり、

「日曜日」の章では 7 哩の舟旅を了えて着いた Billerica 村の描写から始まり、彼は声を強めて野蛮性礼讃をする。やがて Billerica 瀑布の上手から森中を 6 哩にわたって流れる運河に出て、一人が下りて岸边伝いに舟を曳いて行き、遂にメリマック河に出る。彼の筆はやがて宗教論となる。そこにはすでに彼の汎神論的宗教観が現われている。詩論や文体論も出る。Rabbit Island を回って Tyngsborough に着き、テントを張る。

「月曜日」は朝霧こめる河を溯る。いつの間にか政治論が出る。次に歴史や伝記や音楽について語る。

「火曜日」Merrimac と Litchfield の間を通り Cromwell's Falls や Moore's Falls を通って Bedford 町に着く。沿岸の景色や住民についての描写もうまい。

「水曜日」この章では friendship について述べており、友情について言い得るあらゆることは、花に対する植物学のようなもので、いくら議論したとて友情の自然の美しさを説明することはできぬといい、さらに、友は私の肉の肉であり、骨の骨であるとさえいっている。

「木曜日」ある百姓家に物を預け、Pemigewasset 河に沿う森中の路を通過して Agiocochoo の山頂に到達。次の木曜日ある百姓家に帰り、正午に舟出して帰路についた。下りの舟は早く、夜になると Merrimac 河畔にテントを張った。この章では天才と詩人についての意見、ゲーテに対する批判

もある。

「金曜日」この1日の内に50哩の旅を了えた。野生的な英雄 Osian を礼讃したり、天才 Chaucer に対する謳歌もある。

この著作の随所に引用された多くの詩文は彼の読書の範囲が如何に広がったかをも示すに足る。

またこの舟旅に用いられたボートは後に N. Hawthorne の所有となった。

「Thoreau と Emerson との関係」はその題下で発表した拙稿（英米学研究第4号，1967.）を参照して貰いたい。当時アメリカ思想界の指導的地位にあった Emerson が Thoreau に大きな影響を与えたことはいうまでもないが、そもそも二人が知り合うに到った動機は次のようであった。すなわち、Emerson の縁者に当る Brown 夫人が Thoreau の母を訪ねて対談中、話題がその頃 Concord で催した Emerson の講演のことにおよび、傍にいた Thoreau の姉 Helen が弟 Henry も Emerson の意見と同じことを彼の日記に書いているとその日記を見せたので、このことを聞いて Emerson は会いたいといい、こうして二人の交りが始まった。

このことからしてもすでに二人の間に前々から相通ずるところがあったのである。それが Emerson との親交によってますます刺激開発されたといつてよからう。

かくして彼は Transcendentalism の仲間入をしたのである。

この transcendentalism という言葉は元々制限を超越する意味のある Latin の動詞 transcendere からきているので、一般的な意味では、窮極的な実在の超越的な性質を説く哲学のことを英語では意味するし、それは元来 Hegel や Fichte 特に Kant の独逸哲学からきている。それが後には1830年頃から New England において始まった運動に漠然と用いられるに到り、ついには、はっきりと Emerson や Thoreau などに対して用いられるようになった。

New England transcendentalism はいろいろな形式で表現された思想体系で、その源泉は三つあり、まず第一にそれはある程度は Puritanism に対する思想的反抗から自然に発達したものと見える。第二には前述の 18 世紀の独逸哲学の教えた ideal world の観念が英国の Coleridge や Carlyle によって復興され、次いでアメリカにも大きな影響を与えた。なお第三には東洋思想の影響があった。ペルシャや印度や支那の古い經典などの翻訳が現われ、かつ読まれ始め、この時代の偉大なアメリカの作家達はそうしたものを知っていた。Emerson ことに Thoreau はその点で特筆すべきである。

アメリカ人の熱情的な性質は間もなくこの新しい人生観をいろいろな方面で表わしたが、その中にも次の五つは考慮すべき価値がある。

1. Unitarianism. この Unitarianism は Puritan church 内に生じ、後にそれから分離した新しい一宗派で、その神学は impersonal deity の存在とすべての創造物の統合と divine love の普遍性を教えた。それはいかなる種類の dogma にも、儀式にもとらわれなかった。そして Unitarianism の新しい指導者達は transcendentalism の宗教的様相を強調した。

Rev. Dr., W.E. Channing はこうした Unitarian 派の牧師として transcendentalism への道を示し、最初 Unitarian 派の牧師だった Emerson は牧師をよして transcendentalism のもっとも代表的人物となった。

2. Community living. transcendentalism の新しい理想に興味を持った多くの人達は人間は皆互に兄弟同胞であるということを感じた。彼らは理想の共同社会を建設することによって現今の社会の邪悪から脱しようとした。

これらの計画中もっとも有名なのは George Ripley や Margaret Fuller が 1841 年に設立した 'Brook Farm' であった。また Amos Alcott は 1843 年に Harvard の近くの地所を手に入れて友人達とともに 'Fruitlands' と称する Community を計画した。他にもそうしたのがあったがいずれも失

敗で、'Brook Farm' は 1847 年に解散し、'Fruitlands' は 1 年足らずで止めてしまった。しかしそれらは多くの人々が新しい理想に注いだ熱情を現している。

Thoreau は 'Brook Farm' を一度訪ねたことがあった位で、これらの Community には参加せず、傍観者であった。それは彼がそうした Community に参加することによって自分の個性を少しでも犠牲にすることをさけたからであった。彼にとって何より大切であったことは、まず自分自身を完成させることであった。

3. *The Dial Magazine*. 超越主義の機関誌ともいうべき *The Dial Magazine* は 1840 年 7 月創刊されたが Margaret Fuller がその編輯と会計の任に当り、Emerson は主筆格で月号沢山書いた。Thoreau は創刊号に例の詩 *Sympathy* を掲載し、その後も彼は引続き月号寄稿した。編輯に行きつまった Fuller がそれを Emerson に返すと Emerson は Henry に協力を頼んだ。こうして Henry の努力で *Dial* は面目を一新し、西欧の知識に東洋の智慧を加味し、原稿の足らぬ時は己が日記の抜萃を利用した。しかしその雑誌は 1844 年の 4 月で終りになった。最初から経済的には成算のとれるものでなかったが、それら新思想の唱導者達を、一つの社会的勢力に結成した点では、アメリカ思想史上また、文芸史上に大きな意義をもっている。

4. *The Transcendental Club*. *New England* では多くの傑れた人々が新しい人生観を討論する目的で形式ばらないで会合し始めた。後には散じて、そうしたクラブはなくなった。しかし彼らの会合はその運動の宣伝に役立ち、それをさらに秀れたものにした。

5. *Literary movement*. 新しい作家の一群が彼らの作品にその超越思想を取入れ始めた。それらは大概自然から靈感をうけた一種の神秘主義を説いた。この時代のほとんどすべての作家達が多少とも超越主義の思想の影響をうけた。Thoreau は Emerson と並ぶ代表的な人であり、Whittier も

Whitman もその点相当目立っており、Margaret Fuller も Alcott も各々の特色をもった超越主義者であったし、Hawthorne や Longfellow、それに Lowell でさえ何らかの形でその影響をもっている。

Thoreau はもともとその強い傾向をもっていたが Emerson と親交を結ぶに到って、はっきりと、transcendentalists の仲間入りをした。それは彼に思想や作品の発表の機会を与え、思考をますます深め、彼の胸裡に潜んでいるものを具体化して、引出す働きを務めた。すなわち Thoreau は 'Concord Lyceum' での講演を初めは聴講していたのだが後には自ら幾度も講演するようになったばかりでなくその幹事役まで引受けたのであった。Emerson の名声と共に Concord が有名になると、そこに集まる人達が可なり多く、1840年には Amos Alcott、1841年には詩人 W.E. Channing が来て Emerson の家の近くに住んだ。(拙稿「Thoreau と W.E. Channing II との関係」英米学研究 No. 5 を参照)

Hawthorne も来た。前からの人では George Ripley, Elizabeth Hoar などがいた。こうしている内に、よく Emerson の家に集っているいろいろな題目について思想の交換や討論をするようになった。

その集る人々は何にも正式に名簿があった訳でもなく、そのメンバーも時々変ったが Emerson を始め、Rev. Frederick Henry Hedge, Rev. George Ripley, Rev. Orestes Brownson, Rev. Jones Very, Margaret Fuller, Elizabeth Peabody, Bronson Alcott, Rev. Theodore Parker, Christopher Pearce Cranch, Rev. John Sullivan Dwight, それに Henry David Thoreau などで Hedge は Maine 州の Bangor の教会からはるばるくるので、会合はこの Hedge の来訪に合わせて開くことが多かった。

これらの人達は共通して理想的であり、形而上的な傾向が強く、新プラトン派とでもいってよいかしれないところがあった。こうした傾向ができるに到った経過を振りかえってみると、まず18世紀の始め英国の John Locke が出した *Essay on Human Understanding* の示す理論——すなわち、

人間の智慧は五官から生ずるという理論——から発達した nationalism や deism はアメリカの独立後間もなく New England の神学上の指導者達に深い影響を与えて、trinitarian christianity (三位一体すなわち Father, Son および Holy Ghost の一致を信ずるキリスト教) から一層合理的な Unitarianism となっていたのが、さらに独逸の Hegel や特に Kant の説える人間には生来直観的な五官を超越した智慧があるという思想の影響をうけた。そうした人間の力を人によっては conscience, moral sense, inner light あるいは over-soul という言葉を使って説いた。そして全体的には Transcendentalism という言葉が用いられるに到った。

Thoreau は 1841 年の 4 月から 1843 年の春までこの Emerson の家に同居したので Emerson およびその家族とはますます深い間柄となった。The Dial との関係においても、初めは唯執筆寄稿をしていたが後には Emerson を援けて編輯するやら、購読者の勧誘をさえするようになり、彼が超越主義者の思想的指導者の一人と認められるようになったのはこの雑誌で発表した彼の作品によることが大であったといえる。1842 年 7 月の Dial に掲載した彼の The Natural History of Massachusetts の中には彼の心や性格もよくうかがえる。New York に近い Staten Island に住む William Emerson の家の家庭教師として行ったのは 1843 年のことでここに滞在中 New York へ行って W.H. Channing や New York Tribune を主宰していた Horace Greeley と知り合い、それが後に自分の著作を出版する機会を得るもとなった。Dial が廃刊になった 1844 年には再び故郷の Concord に帰ったが、前々から心中秘かに持っていた隠棲に対する念願は 'Brook Farm' や 'Fruitlands' などの刺激もあり、またすでに野の生活の経験者であった Channing の暗示もあって、ついに決意して 1845 年の春、Walden 池畔に一軒の小屋を自分で建て始め、それができるとただ一人で森林生活に入った。

'Brook Farm' や 'Fruitland' は同志が共に理想的な社会を作ろうとする

のであったが、Thoreau のはただ一人で生活して自分の内的な眞の姿を視つめ、自然の実相にふれようとしたのであった。

V

彼は Concord の南の 1 哩半位の人里離れた Walden 池畔の森の中に Alcott から借りた斧で松の木を切って柱として小さな小舎を建てて、独居を始めたのは 1845 年 7 月 4 日、ちょうど米国の独立記念日であった。

独居といっても彼は世を果無んだり、ただ人間との交わりを嫌って隠棲したのではなく、大自然に接して種々な自然の姿を追求し、かつ自然に浸る身心の楽しみをしみじみと味わい人間が一人で生活することによって得るいろいろな経験から人間および人間社会のことを再吟味し、しかもなお己が内なる世界をさぐり、その霊を広く宇宙に拡げて物心一如の世界に達しようとしたのであった。こうした生活をするのに Simple Life の大切なことを説きかつ実行した。

この森の生活の記録を整理して発表したのが彼の有名な *Walden or Life in the Woods* である。

この本は *Economy* に始まり、*Conclusion* に終る 18 章からなっている。

彼は世人がいかにかに因襲に捕われた無自覚な無駄な生活をしているかを述べ人間生活の再吟味のため食物、家、衣服、燃料などの必需品のことについて考え、多くの人間がいかにかに不必要なもののためにあくせくとして自分の生活を駄目になっているかを説き、人類を改善するには生活を複雑にするのではなく大自然の如く単純かつ健康にしなければならないといっている。

第三章 *Reading* では古典を読む必要を説き、第五の *Solitude* の章では自然と交わる時は孤独も孤独でなく孤独の生活は自己完成のためにも必要なことだと考えた。この章は彼の思想の性格を見る上に非常によい参考になる多くの秀れた章句がある。

Visitors (第六章)、*The Bean-Field* (第七章)、*The Village* (第八章)、*The*

Ponds (第九章) などでは周囲の自然や動植物の有様、訪客のこと、彼の小屋での生活、四季における湖の様子、Baker 農場のことなどが記されているが、*Higher Laws* (第十一章) では肉や刺激的な食物飲料を避けて、神性を呼び覚まし、高尚な思考や高い詩情をもち得る人は幸であると考えた。こうした点は吠陀 (Vedas) など東洋の聖典の影響を強くうけている。*Conclusion* では世界を探検するより自分自身の内海を探検せよ。正しいと信ずることに向って打ち込む一瞬一瞬の価値は無限である。まず真理をつかめ。

健全な人間は社会の法則に一見反しておりながら一層高尚な神聖な法則には遵っていることがある。もし公正な政府の下に立ち得る機会があれば決して反対の態度にはならないであろう。自分は森林に入ったと同じく、十分の理由をもって森林を出た。自分にはなおいろいろすべき生活があった、この一つのためにこれ以上多くの時日を過すことはできないと思ったから。自分は実際経験から少なくとも次の一事を悟った。すなわち、人がもし信じてわが夢の方向に進み、努めてその想像した生活を営めば普段想いも寄らなかつた成功をかち得るであろうと。すなわち眼に見えない境界を越える。すると新しい普遍的なかつ一層寛容な法則が身の周りにも精神内部にも現われる。そして自分の生活を単純化するほど、宇宙の法則も次第に単純化して、寂寞も寂寞でなく貧乏も貧乏とならず、不平家は楽園にいてもなお不平を見出すであろうが、貧しくともその生活を愛せよ。さすればぞくぞくするような栄光に満ちた時間を楽しむことができよう。心の平和なる者はどこに住んでも王宮に住むと同じく満足の生活をして歓ばしい思想を持ちうる。

愛よりも金銭よりも名声よりも真理を与えよ。人間はこの地球の極く表面だけしか知らない。しかも一生の半ばは昏々と眠っている。しかも自らは聡明であり、深い思索家だと想っている。林の中の小さい虫が葉の間を這い回り、人の眼から逃れようとする。その虫が何故に微々たる自己の思想を抱いてかく避けて頭を隠そうとするのか。自分がその虫の愛護者でそ

の種族に何か快よい考えを告げ知らせることがないとも限らないではないかと怪しむが、この時人間の小虫である自分の頭の上に立つより偉大な愛護者、より偉大な知者のことを思い浮べないことはない。

かつて林檎の樹を材にした農家の厨のテーブルから丈夫で美しい bug (ヘッピリ虫) が自ら木を噛んで外へ出てきた話がある。それはテーブルが作られた年よりさらに数十年も前にその立樹の中に産付けた卵が、どうやら火消壺の熱で孵化したらしい。

私は誰も彼もがこうしたことを実現するとはいわない。これは単なる時の経過では到底将来し得ない本当の暁の特徴である。われわれの眼を眩ます光はわれわれにとっては暗黒に過ぎない。われわれが目覚めてこそ夜明がくる。その時は太陽も朝の星に過ぎない。

このように Thoreau はその *Walden* の *Conclusion* を結ぶに当って、不思議な生命の力を讃え、人間がそのように本当に目覚める日を期待した。

Thoreau が2年と2カ月の森林生活から出てきた年の10月に再び Emerson は英国へ旅立ったので、その留守中また Emerson の家に住んだ。そして1949年に Emerson が帰ったので、Thoreau は父母の家に帰った。彼の文学者としての活動は死ぬまでここで続けられたのであった。

彼の *Thomas Carlyle and His Works* が1847年の3月および4月号の *Graham's Magazine* に発表されたのは Horace Greeley の世話と同誌の主宰者 R.W. Griswold の好意によるものであった。それに続いて *Civil Disobedience* が1849年の *Boston Aesthetic Papers* に発表された。彼の最初の著書 *A Week* が出たのはこの同じ1849年であったがそれは自費出版で Boston の Munroe 書肆から出した。彼はその借金支払のため土地測量の仕事をやったりした。この本は初版千部印刷したが売行が悪く、1853年にはその残部706冊を引取らねばならなかった。

Salt はこの本の売れなかった理由はその強い理想主義と汎神論的な調子とが普通の米人の心とうまく合わなかったためといっている。(Salt's *Henry*

David Thoreau p. 107, 参照)

それもそのはずでこの著作は後に出た他の本とも同じようにちゃんとまとまった構成の下に書かれたものでもなく、あの 1839 年に兄 John とともに出かけた Concord 河と Merrimac 河の紀行を中心にしてはいるが、彼の理想主義的哲学思想をいろいろな話題に託して表述し、それに自分の詩や他の詩人達からのものも到るところに引用しているので、心ある者が読めば、そこに記述された野生的自然の描写とともに彼の独創的な思想に底知れぬ喜びと興味を感ずるであろうが当時の浅薄な一般のアメリカ人には余り理解されなかったのも無理はない。

私は本稿の第二章で、Thoreau は余り大旅行はしなかったといったけれど、それは Emerson のように、遠く欧州へ二度も長期旅行をし、また、北米大陸をカリフォルニアまで横断したのに比較してのことであったが、旅行好きであり、しかも荒野を求めて度々旅行したことにおいては、彼は余り後に落ちないというよりも、文人で彼位そうした旅行を度々した人はまれであろう。実際旅行は彼の生涯の相当主要な部分を占めていた。北は Canada の Quebec, 南は New Jersey, 東は Cape Cod, 北東は Maine Woods の奥深く、これらを旅する毎に彼は森や荒野や河や湖や山や海を探り、インディアンの文化—その言語や歌や風習なども—研究して、十数年の間に三千頁近い Notes を残しているが彼はそれによって、一種の大敘事詩を作ろうとしていたということでもあるが、もし、彼が 45 歳なんかで若死せず後十年も長生きしていたらそうした業績があるいは完成されたかもしれない。彼の臨終にかすかに口にしていた言葉からみてもインディアンのことが彼の心の中にかにあってはいたかが察せられる。とに角、彼はこのように各地を旅行して、アメリカの過去、現在、将来についての自分の考えをいつも明らかにしようとしていた。彼の旅行はいろいろな方法でいろいろなコースをとった。馬車や汽車や蒸汽船やカヌーや徒歩で。しかし、その度に自然についての自分の基礎的な信念が一層正しいのに確信を

得て、帰ってきた。森は「永えの青春」の場所であったし、あらゆるわれわれの文明の源であった。森の唯中に昔住んでいたインディアンの生活は彼の心をひきつけるものであった。そして、植物学および動物学とともに地理学は Thoreau にとっての重要な仕事の一つであった。‘the pleasure of poetry’ もそこからくることが多かった。Thoreau の作品中にはこの詩と事実という二つの要素が交っている。

Thoreau は測量士でもあったので地図を正確に作製することができた。旅行をする時その行先に関する地図を手に入れて、行ってみると実際といろいろ違っているところを見出し、これを訂正しなければならないことがよくあった。自分でも幾度も地図をかいたが、それでも現地に照してみると訂正しなければならないこともある。彼のような歩行者、自然愛好者には普通の地図では役にたたぬことが多かった。しかしたとえば Cape Cod 地方の早い地図で 17 世紀の日付のある フランスのものはとてもよいと思ったがそれも過去の経験の所産として尊重したのであった。地図を利用するものが読み違えることもあるが、地図が不備で実地経験と相違して旅行の計画に影響することもある。彼は実際よく旅行し、そのため随分長い時間と精力と金とをつかった。といっても貧乏の上、常に簡素を旨としていた彼のことだから旅行中はなおさら簡素で、粗衣粗食であったことは言うまでもなく、安易な路をとるのをさけた。これはちょうど行脚修行する東洋の謹厳な僧侶にも似ていた。

1970 年に Princeton University Press から出版された *A Thoreau Gazetteer* by Robert F. Stowell. edited by William L. Howarth は Thoreau が一生の内に旅行した主なものに関係ある地図を集録し、各々の地図の解説や、当時利用した汽船の写真や関係ある風景をのせ、なお、Thoreau の旅行の簡単な年代記を附記し、Index には Thoreau の著書中の地名と地図上の地名とを対照させてある。

これに掲載されている地図には三種類あり、第一は Thoreau 自ら書き

たもの、第二は彼と同時代のもの、第三は彼の記録や他の種類から複製したものである。その集成は Thoreau の本の出版日時順になっており、*A Week* とともに始まり、*Journal* (1906) とともに終わっている。この著者は Introduction で「この本の最初の目的は Thoreau が本の中で述べている土地が読者に分かるようにするためである。これらの土地の重要さは Thoreau についての読者の批判的見地の如何による。文字通りに読む人には Massachusetts, Maine, Canada, Cape Cod, Minnesota における彼の旅行をたどる便利な路を提供するであろう……。象徴的に彼のを読む人にとってはこの地図は象徴的な河、湖、山を描くであろう。それらは彼の芸術の想像的所産の背景である。Thoreau の著述の背景は彼の旅行の土地と同意語であるからこの *Gazetteer* を研究する読者達はそれが彼の生活にとっても芸術にとっても共によき手引であることを見出すであろう。」という意味のことを述べている。

A Week に関する旅行のことは既に述べたから今度は *The Maine Woods* に関係ある Thoreau の旅のことについて書こう。

1846年に Thoreau は汽車と船を利用して Bangor へ渡り、そこから Oldtown へ行き、Penobscot 河を Sowadehunk Falls までカヌーで行き、それから、Mt. Ktaadn の山頂へ登った。帰りは船で Boston へ着いた。1853年には汽船の Penobscot 号で Bangor へ渡り、そこから Monson へ行き、汽船で Moosehead 湖を横ぎり、Penobscot 河の West Branch をカヌーで溯って、Chesuncook 湖の源流まで行き、汽船 Boston 号で Bangor から帰って来た。1857年にはカヌーだけで同じコースをたどり、さらに Chamberlain 湖、Telos Lake, Webster Pond, および Grand Lake を経て Penobscot 河の East Branch を南下して、その本流に出て帰って来た。

Thoreau はこれらの旅行に地図を使ったが、しばしば迷路に入り、自ら地図を訂正したようであった。

私が大正6年に一友とともに当時ほとんど人の訪ずれることもなく、路

という程の路もない富士五湖めぐりをした時のことを憶い出す。その際利用した当時の陸軍参謀本部作製の地図でさえ載っていない、また違っている路をさがしさがして、地図を訂正しながら行ったことを憶い出す。あの時青木ヶ原の原始林の中を夜晩くまでさまよっていたことを憶うとぞっとする。そのスケールが遙かに大きく、森と河と湖の荒涼たる Maine をかく三度も旅行した Thoreau は大変だったろうと想う。しかし彼が Indian の文化研究や動植物の研究もあったろうが何をいっても荒莫たる大自然の美と力と神秘的なあるものに魅せられていた彼にはそんな苦勞は何でもなかった。否むしろその苦勞はかえってえもいえぬ楽しみだったろう。

私は今から約8年前少しでも Maine の森らしい所まで行ってみようと、Boston の空港を朝発つ Buffalo 行の飛行機をキャンセルして、車に飛び乗り、運転手には Maine の森林らしい所へ行ってくれと命じた。そして直ちに一路北へ北へと Maine を指して走らせた。後で思えば、Thoreau のように Bangor までまず船で渡った方がよかったのだが、船の時間も分らなかったで、車の力をかりた訳で、途中休んだところといえば、唯 Rock-Port でいろいろなギャラリーを数軒のぞいて、絵の個展や小展覧会を見た後でコーヒーを飲んで一休みしたのと Bangor で食事を取るために休んだのとだけで、後はいかなる町にも村にも一斉留らず、1時間100キロ位の速力で、道のよいのを幸に専ら北へ北へとまっしぐらに行った。相当長い間何処までも何処までもつつ走った。路の両側もまた見える限りが鬱蒼たる大森林。時たま自動車に会うが通る人もない。大森林の中の道だ。もし質の悪い運転手だったら、どんな目に会わされるか知れない。少し不安な気にもなったが、いろいろ話をしてる内にその運転手の一人の息子は柔道が好きで三段になっており、日本へ憧れているし、一人の娘は絵をやっていたので自分も絵が好きだという。これは Rock-Port の展覧会を見ていた時でもその話振りから大体その人柄が分っていたので安心していった。途中河あり、池あり、湖あり、いろいろなところを通った。Thoreau

なら地図を頼りにあるいは地図を訂正しながら、森の中を歩いたり、河をカヌーで渡ったりしたのだが、自分は自動車でよい道を唯楽々と走っているのだから、とても Thoreau 時代の彼の旅と比較にはならないが、この辺りの森林や河や山の状態はそうひどく変わるものでもあるまいと、自分の心を慰めながら進んだ。その道は昔 Thoreau が通った路とどんな関係があるのか全く分らない。否そんなことはどうでもよい。Maine の大森林の雰囲気吸えればそれで自分の目的は達したのだと思った。始めは自動車を降りて少しは細い路へも這入り込もうと思っていたが、物凄い雷雨になったためそれもできず、Boston を朝早くたったのに、暗雲豪雨のせいもあって早や夜のように真暗になってしまったので、もうそれより先へ行くのを断念して帰途についた。その時は地図も持たず果して Maine の森のどの路をどの辺りまで行っていたかさえ、皆目分らずいいで Boston に帰って来た。兎に角 Maine の森は物凄い森であることをしみじみ感じたのであった。

しかし、タクシーの運転手から莫大な料金を請求されて驚き、始めて、その時、スイスで Boston 出身の米人から Boston へ行ったらタクシーには絶対に乗っては駄目ですと言われていたことを憶い出したが後の祭であった。でも Thoreau の心をひきつけて三度も旅行させた Maine の森をたとえその一部分であったとしても訪ずれることができたことを想えば安いものであったといえるかもしれない。

次は Thoreau の Cape Cod の旅である。

私は Maine の森を訪ずれたのに続いて、Cape Cod へも行ってみようと思ったけれど Thoreau は前後四回も行っており、行く度にそのコースなども違っているので、まだ他に多くの行くべき所があった自分にはとてもその後を追うてみることは不可能と想ったので遂に断念した。

Thoreau はまず 1849 年 10 月には Channing とともに汽車で Bridgewater から Sandwick へ行き、馬車で Orleans へ、それから徒歩で Provincetown

へ行った。その途中二人は Easthem, Wellfleet, および Highland Light を訪ね、帰りは Provincetown から汽船 Naushon 号で Boston へ帰った。

1850年の6月には一人で Boston から船で Provincetown へ行った。また汽船で帰る前に Chatham のような遠い南へ歩いて行った。

1855年の7月にも Channing と一緒に、Cape Cod へ行ったが、二人はまず Boston からスクナー船 Melrose 号で Provincetown へ渡り、そこから Olata 号で帰って来た。この時の旅行は半島の北端に制限して、歩いたのは North Truro までであった。

1857年の最後の Cape Cod 旅行は今迄よりさらに長く、さらに冒険的であった。唯一人で Plymouth から Sandwich まで汽車で行き、それから東南へ Harwich まで歩き、北へ曲って、Provincetown まで行った。彼はこれらの旅行を全部書き上げた。初めの三回のは *Cape Cod* として、また最後のは *Journal* (J: IX, 415~455) として書いた。この四回の旅行で、彼はあの「Massachusetts の裸の曲った腕」の地形について、できるだけすべてのことを学んだ。そして、彼はよいコンパスと地図は最良の案内者であることを知った。なぜなら土地の人々と雖も、いつもよく歩き慣れた路から離れた地域については余り知ってる者がいないからだ。Cape についての在来の地図は彼には不十分に想われたであろう。というのも彼は少くとも三度も自分で地図を書いたから、恐らくそれらでさえ、実際経験に直面すると十分ではなかったであろう。

次は *A Yankee in Canada* に関係ある旅である。Thoreau はこの Canada 旅行の時、前もって注意深くその地域の研究ができなかった。特に地図が問題であった。当時の Concord には適当なものがちょうど手に入らなかった。埋合せに、旅行中、Canada の地図を写した。そして、土地の人々からその余の詳細な点は尋ねることにした。帰ってから、彼は Canada についての沢山の本を読んだ。また Harvard の図書館で補足的な地図を研究した。この研究から彼はいろいろ原稿の上でも収穫があり、また二枚の

オリジナルな地図を作り上げた。

この Canada 旅行は 1850 年の 9 月のことで Thoreau は Ellery Channing とともに鉄道で Boston から Vermont 州の Burlington まで行き、それから汽船で Champlain 湖を横切って New York 州の Plattsburg へ行った。大概の記録では二人が汽車で St. John まで北へ進んだことになっているが、どうやら二人は別の船に乗ったようである。Plattsburg と Montreal 間の鉄道は 1850 年はまだ建設中であった。Rouse's Point から St. John までは 1851 年以前はまだついていなかった。それだから、Thoreau と Channing は少くとも St. John までは汽船に乗らねばならなかった。そこから汽車は Montreal までついていた。Montreal から Quebec までは汽船 *John Munn* 号で行き、そこから帰路についたのであった。

それらの旅行の外に時には Cambridge や Boston へ行って大学や Natural History Society の本を借りて読むこともあったし、Salem ではその Mall Street へ移り住んでいた Hawthorne を訪ねたこともあった。Margaret Fuller が乗っていた The Marchesa d'Ossoli 号が Fire Island 沖で難破して、家族諸共溺死した際には、E. Channing とともに遺品さがしに Fire Island へ行ったりもした。これらの旅行は彼の眼界を広めまたいろいろな感慨を引き起こしてはいるが、とにかく貧乏であった彼は余り遠い外国などへは行かなかった。外国へ行くよう招待されたこともあったが、彼は Concord で随分旅行できると議論して、行かず、主として故郷の Concord およびその周辺の自然に絶えず親しんでいた。「地球上のこの場所をますます深く研究しかつ愛するようになった。」(‘I have been……made to study and love this spot of earth more and more.’ Thoreau’s Journal, 2nd December, 1853.)

1849 年姉の Helen が亡くなって家の中が急に淋しくなったけれどその外は大体その頃の Concord の家における彼の生活は平和であった。その家は彼が助力して建てた家で彼の書斎は屋根裏の部屋で、植物の採集品や

インディアンの遺品などを置いてあり、ほとんど毎日午前中は読書をしたり、執筆したり、鉛筆製造の仕事をしたりし、午後は幾哩も離れたどこかの丘とか池とか森とかを訪ずれた。親しい友と二人連れで行くこともあるが、途中ではその他の誰にも会うこともないような人里離れた所を逍遙して自然に親しみ悠々自適した。(Thoreau's letter to Harrison Blake. 1849年11月20日付参照)

Thoreau は早くから奴隷問題に対しては深い関心をもって居り、政府の奴隷圧迫が目立ってくると、彼は奴隷制度廃止のためにますます情熱もやし、1851年10月1日の日記には彼が一人の奴隷を家に泊めてやったことを書いているし、1854年には Framingham で 'Slave in Massachusetts' と題して講演している。この年は *Walden* が Boston の Messrs. Ticknor & Co. から出版された時であった。これは前述のように Walden 湖畔に住んでいる時のことを書いたものが主であるが後にいろいろ附加している。この本は *Week* と異なり、数年の間に第一版は売り切れになった。

後に多くの東洋関係の本を送ってくれた英国の Cholmondeley と彼が知り合ったのも1854年のことであった。New York で Walt Whitman にもったのは1856年であった。

John Brown が Kansas で奴隷解放運動をやった直後の1857年3月に Sanborn の家へ来た時 Thoreau も会った。Emerson も来て、その夜の Brown 講演会にはともに出席した。

1859年10月、60代に入ったばかりの John Brown は再び Concord に来り、Sanborn の家を後にして、Virginia の奴隷狩り共に反抗する最後の運命的な旅に出かけた。しかし10月16日に Brown は Harper's Ferry で逮捕され、数週の後12月2日には遂に死刑にされたのであったが、1859年の10月30日の夜、Thoreau はこの John Brown のために Concord の教会で真情をこめた講演をして、釈放運動の口火を切ったが、それは *Plea for Captain John Brown* の内容をなすもので、John Brown の経歴人物、

その超越主義的な思想と彼の一生の目的を述べ、Brownの行動の正しかったこと、彼のような人を作るには数世紀を要する。諸君は十字架にかけられるキリストを案ずるような顔をしているが、身を挺して400万人の救済者たらんとした彼に対して、今何をしようとしてるかと訴え、彼の生命を永遠なものにするための力強い弁護をした。

Brownが死刑にされた日にはConcordの町会所で記念の会が開催され、Emerson, Thoreau, Alcottその他の奴隷廃止論者達が集って、追悼演説をしたが、その時Thoreauはいろいろな人の詩とともに自分で翻訳したTacitus Cornelius (A.D. c. 55~c. 120)からのものを朗読した。がその7ヵ月後に発表した*The Last Days of John Brown*では死んでもBrownの精神は時間や空間を超越して生きており、「彼はもはやこっそり活動しているだけでなく、公然と活動し、この国を照らすもっとも明るい光の中で活動する。」(Thoreau's Works, Miscellanias, p. 450.)と称えている。

Thoreauは文明社会のいろいろな悪弊欠陥を痛感し、自ら信じて正しいと思うことでは、相手が教会であろうと、政府であろうと安易な妥協はしなかった。彼がWalden湖畔の小舎で生活中のある午後、たまたま靴屋へ靴をとり村へ行った時、税の支払い拒絶のかどで捕まってConcordの獄舎に一夜を過ぎねばならなかった。これも奴隷制度の拡大を意図するメキシコ戦争を支持する政府の対内対外政策の非を確信したためにとった反抗であった。その時心配してやって来たEmersonが“Henry, why are you here?”といったのに対して“Why are you not here?”と答えたのは有名な話である。

彼は徹底個人主義者だったので、“that government is best which governs not at all.”「全然支配せぬ政府こそ最良である。」とさえ極言している。この理想はもちろん個人の人格がまず完成されてこそというのであろうが、個人の自覚と自由をいかに尊重しようとしたかがわかる。*Civil Disobedience*が書かれた精神が自からよくわかる。個人の尊厳の絶対性と邪悪な

政府に対する反抗精神の必要性を主張したこの essay は印度のガンジーや黒人のキング牧師などの非暴力反抗をモットーとした自由民権運動の指導者達に対して非常に大きな影響を与えた。

1860年の11月に Thoreau は樹の年輪を調べていて風邪をひいたのに、Waterbury での講演の約束を果すため無理をして遂に肺結核を発病させた。彼の祖父も同じ病気でなくなったのだから、そうした体質をも遺伝していたかしのれない。医者への契めもあって、翌年5月11日から7月9日にかけて Minnesota 方面への旅行をした。Horace Mann もこれに同行した。二人はまず汽車で Dunleith まで行き、Mississippi 河を汽船 Itasca 号で溯って St. Paul へ行った。ここでは9日間滞在して周辺で植物採集をした。6月5日には Calhoun 湖と Harriett 湖の中間の田舎の下宿屋へ移り、そこで Redwood への出発までいた。河は St. Paul の所で二つに分れているが、南の方の Minnesota 河を汽船 Frank Steele 号で溯って Redwood 近くの Lower Sioux Agency に着いた。6月22日には帰途につき、Red Wing では4日滞在し、Michigan 湖や Huron 湖を船で渡り、後は汽車で Ogdensburg, N.Y., を経て Concord に帰り着いた。

保養のためもあったとはいえ、あの病中の身体で船と汽車とを利用しての約2カ月の大旅行であった。当時の Minnesota 地方はまだ開拓もほとんど出来てない Wildness であったのでこの状態は彼の心を喜ばすと同時に身体には大分こたえたのではないだろうか。そのためか Thoreau はこの旅行についての本は書いてない。病身のため日記も十分につけられなかったようである。それにも拘らず彼は一束の 'field notes' を残していたので、Walter Harding が *Thoreau's Minnesota Journey: Two Documents* (Geneseo, New York, 1962) として出している。

1861年の8月に撮った写真は顎鬚を生やした彼の最後の写真である。冬になって病気は重くなったが死の直前まで原稿の仕事のことは忘れず、1862年5月6日彼は遂に永遠の眠りについた。臨終の僅かに聴きとれる

彼の最後の言葉は “moose” 「大鹿」と “Indian” であった。

葬式の時 Emerson は弔辞を述べ、Alcott は故人の詩 Sic Vita を朗読した。

そして Sleepy Hollow の兄 John の墓の傍に埋葬された。彼の墓は赤い石で彼の名と死んだ日が刻まれている。

私は Walden 湖畔の小舎の跡に Whitman にならって石をもう一つ積み重ねた日と同じ日に Sleepy Hollow の墓に詣うでて、途中でつんだ草花を捧げた。